

震災後論

【3】

す。単に荒原発の問題と経済成長をてました。母は朝鮮戦争が起してきます。出稼ぎでかつる。私は在日韓国人です。れているとんびんに掛けないでほしきて日本にやってきた。暮の東京五輪の工事に携わいま週刊誌で「嫌韓」をあいうのではい」と訴えた方もいる。そらしたのは口見町。そここったけれど、使い捨てられ、おる見出しを見て落ち込み済まない状況の通りです。必要に応じては発電用のダムを造るため帰る場所を失った。ますが、日本社会にとって況です。エネルギーをつくるのではに消えた集落がある。エネその痛苦と、原発事故で他者である立場からも、ひエネルギーのシステムなく、エネルギーのシステムや差別的住む場所を追われた方の痛とくくりこされることに抵抗を維持するために電気をな構造が重なりました。南苦をつなげるちようつがい抗していきたい。

南相馬市の臨時災害局
「南相馬ひばりFM」で毎週放送する番組「柳美里のふたりとひとり」で、パーソナリティーを務めています。継続して関係を築きたいと2012年3月に始め、これまでに200人以上が出演してくれました。

宮城県女川町の災害FM局にゲスト出演した際に、

お母さまの遺体がまだ見つかっていない同年代の女性から「話を聞いただけで終わらせないでくださいね」と言われました。重い言葉でした。受信するだけではわなければいけない。原発事故が起きたとき、昔聞いた母の話を思い出して

「ひとりぐり」に抵抗を

柳美里さん

痛苦をつなぐ小説執筆



作家の柳美里さん

ゆう・みり 68
年生まれ、横浜市出身。97年に「家族シネマ」で芥川賞。

仮設住宅の集会所や津波で流された家の跡などで話を聞きます。あるとき、避難指示解除準備区域への一時帰宅に同行しました。地震で壊れた床が雨漏りで腐り、ネズミが目の前を通り過ぎる。気持ちがふさぎま

お母さまの遺体がまだ見つかっていない同年代の女性から「話を聞いただけで終わらせないでくださいね」と言われました。重い言葉でした。受信するだけではわなければいけない。原発事故が起きたとき、昔聞いた母の話を思い出して

3月に出す小説「JR上野公園口」では、相馬出の声をどうやって抜き出すして語られるのは日々の暮らしであり、そこに一番関心を

若いころは「人生」という言葉が大嫌いでした。だけど今は小説で人生を描きたい。「ふたりとひとり」